

# 「旧敵国の花嫁」、豪移住で苦難

第2次大戦直後、日本に進駐した連合国軍のオーストラリア人兵士と結婚した日本人女性約650人が豪州に渡った。白人が優遇された当時の豪社会で、旧敵国から来た花嫁には冷たい視線が注がれ、日本人であることを封印して暮らす苦難を強いられた人もいた。

## 白人優遇時代に日本色封印

◇名前も英語に

日系人団体「ニッケイ・オーストラリア」のエリシャ・レイ代表(38)の祖母、昭子・カムさん(旧姓平野)は1953年に豪州に移住した花嫁の一人だ。

27年に大阪府で生まれ、広島県内の軍需工場に勤務されていました時に終戦を迎えた。戦後、同

トの仕事を得て、そこで18歳上の豪兵士グレン・カーカムさんと出会って結婚。夫の任務終了

に伴い豪州へ移った。

英國の植民地から連邦国家となつた豪州は当時、有色人種の移民を制限する「白豪主義」を国策とし、日本人を「エヌミー・エイリアン(旧敵國の異人)」と位置付けていた。「豪州人に

は、便宜的に「エルサ」を名乗

り、8年かけて帰化した。

◇解放後は通訳

夫妻は4人の子供に恵まれ、東部ブリスベンや首都キヤンベラなどで暮らした。だが、42年の旧日本軍によるダーウィン爆撃をはじめ交戦の記憶が生々しく残る時代、日豪の結婚に反対や不快感を示す人も少なくなかつた。1人の娘(レイさんの母)

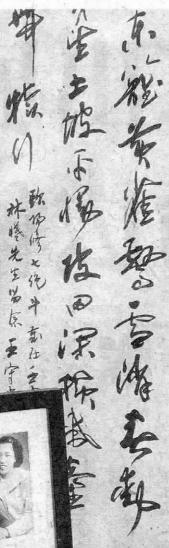
は、容姿に関していじめに遭つたという。

昭子さんは豪社会に溶け込むため日本語を一切話さず、料理も英國式を貫いた。グレンさんは

昭子・カーカムさん(右)と夫のグレンさんの結婚当初の写真豪ブリスベン(時事)

はタイプストとしてひつそりと日本語の教科書作成に携わった。73年、豪政府が白豪主義を撤廃し、多文化を認める路線へ転換すると、昭子さんは日本色を消す20年間の抑圧からようやく「解放」された。その後、東部ゴールドコーストで観光通訳士を務め、日豪交流に尽くし

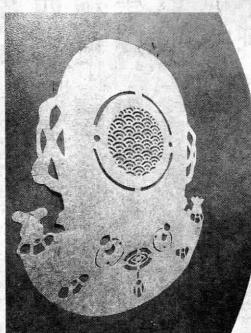
## 多文化転換で交流に尽くす



昭子・カーカムさんの書道作品の横に立つ孫のエリシャ・レイさん=豪ブリスベン(時事)



! **白豪主義** オーストラリアでかつて取られた、白人を優遇し有色人種の移民受け入れを制限する政策。1850年代の金鉱発見後、中国人が急激に流入したことへの反動から始まり、豪連邦が発足した1901年に移民制限法が制定された。日本人移民は明治期から第2次大戦で敵対するまで、製糖や真珠養殖の安価な労働力として一定数認められた。戦後にアジアとの交易が増えたことや人種差別への内外の批判を踏まえ、73年に移民法が改正され、白豪主義は終わりを迎えた。(時事)



真珠養殖の潜水ヘルメットをかたどつたエリシャ・レイさんの切り絵=豪タウンズビル(時事)